

## 海外文献紹介 : International Energy Outlook 2009

(米国エネルギー情報局)

戦略・産業ユニット 研究主幹 前田 智広

戦略・産業ユニット 研究主幹 井上 浩一

### サマリー

米国エネルギー情報局(EIA)は2009年5月に、2030年までの世界のエネルギー需給についての見通しをまとめた報告書「International Energy Outlook 2009」(以下「IEO2009」)を発表した。

IEO2009を要約した「ハイライト」では、全てのエネルギー源においてその消費量は増大すると予測しており、世界のエネルギー需要は、2006年から2030年までの間に44%伸びると見通されている。現在の世界的な景気低迷により、短期的には需要の抑制は見込まれるも、長期的には2010年以降、景気が持ち直すことで、世界的に経済成長とエネルギー需要の双方が増加傾向に戻ると予測している。その中では、原油価格が実質ベースで2015年に\$110/Bbl、2030年に\$130/Bblと上昇を続ける予測しながらも、2030年までは石油は最大のエネルギー源であり続けるとしている。

「石油」の章では、IEO2009の標準ケースでの世界の消費量は、2006年の8,500万B/Dから2030年には1億700万B/Dへと2,200万B/D増加すると予測する。その消費量の増加を満たすべく石油の生産量は、地域別に見ると、OPECが4,400万B/D(増加量900万B/D)、非OPECが6,300万B/D(増加量1,300万B/D)となり、非OPECの躍進を予測している。また、在来型石油と非在来型石油で見ると、在来型が9,300万B/D(増加量1,200万B/D)、非在来型が1,300万B/D(増加量1,000万B/D)と非在来型の大幅な増加を見込んでいる。引き続き、石油は最大のエネルギー源ではあるが、その中身は大きく変化することをIEO2009は予測している。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)